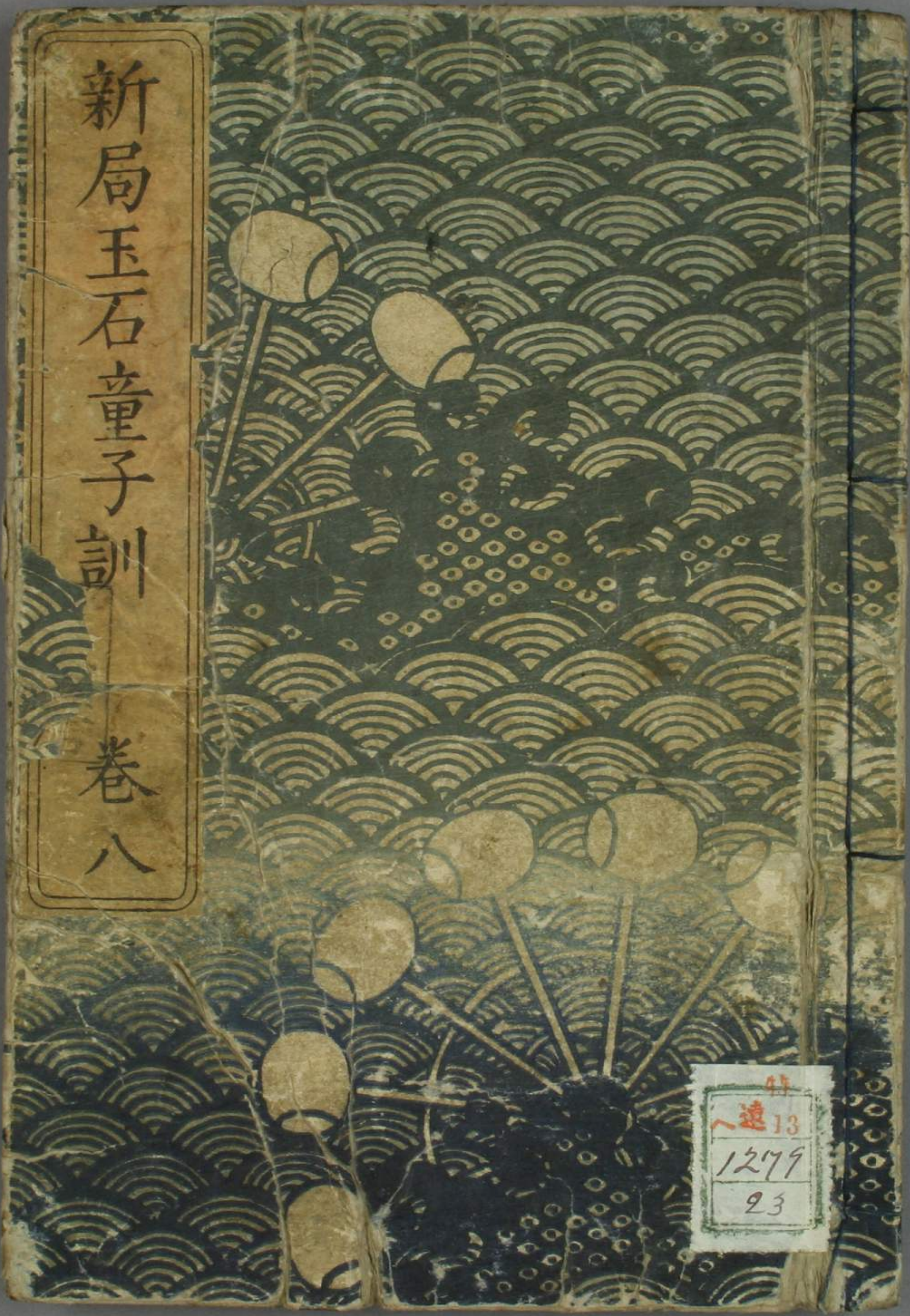




新局玉石童子訓

卷八



44  
速 13  
1279  
23



134  
1279  
23

新局玉石童子訓卷之四下冊

第三十八回

罪過を秘して晴賢阿健と訪ふ  
小忠二怒る朱之介を逐ふ

復説未朱之介晴賢ハ近江の山路を辿りも果む亭午の炎暑堪ら  
けし樹蔭求め路傍る老翁松の下涼に一霎時とて立ちあがり杖を  
汗と納ぐれば風ハ極樂上品淨土と程よ死石尻うち搦て憶む睡りそ在る  
時但見一箇の蜘蛛あり眼ハ百煉の鏡の如く舌ハ燃る柴薪ハ似く  
幹より太なる死身を樹の枝より下まろ口と張舌と吐く黒白も知らぬ朱之  
介と只一呑中を呑ふける介程未朱之介ハ既ハ大蛇ハ腹せられて又蝨く咽聲と  
る時愕然と驚覺てあらいふと訝るのいま其故と知らぬ悄地ハ其腹  
撈試るふ粘ると粘瓶ハ陥る如く執た沸湯を沃くふ似より原來は俺



川卷四二

十六

身ハ蝮蛇ハ吞れハレト申す。心つれても今所ハ謀の出る所を知らず。苦に隨ハ  
又ト思ハ今今ト空ク做ス。ハ竟ハ這身ハ消化せられて蛇糞ト做ラセ  
肛門より出て知る人ハ在ラズ。克ハ一カト破ハ呼吸の中ハ免レ知ラ  
ト申す。思ハ心ト勵シテ腰ト撈ル。幸ハ短刀ハ落ル。我物ハ  
引抜ク。腹ハ思ハ邊ト力ハ儘セテ禺。刺ト大蛇ハ苦痛ハ  
引堪ヒ二十尋有餘の身ト縮メ又身ト伸シ七轉八倒腹内ハ朱之介ハ  
俱ハ其身ト拮擗せられ。輾轉反側をねども。持ハ刀の柄ト緩メ巻ト  
定めて破破ル。其短刀ハ比骨董店アテ買合ハケ。價僅ハ賤物ト思ハ  
おも似世話ハ掘出物ハ銳味精妙又ハ巻ハ從テ厚ク固ル。大蛇ハ腹ト  
列衣ト布ハ異ル。亦利ハ危窮ハ割捷思ハ隨ハ折用ハ撥ト漬  
鮮血ハ勢ハ朱之介ハ推出されて地上ハ礮ト輾ト思ハ是ハ南柯ハ夢ハ

け依登時暗賢愕然と驚覺ても安らぬ心神のま定らぬ恍惚と病  
あはれ頭ト拾げて東西ト見エラ大息嚙テ世々時々這空ハ做リ果  
来ハ己の年ト秋葉あり。十二生肖ハ亦蛇ハ其腹内より生ズ。俺生  
来ト思ハ相別ト九九年音信絶テ多クハ母親の今ハ猶ト忘  
るハあらねども薄情ハ虚ハ夫の為ハ子ハ棄ラレ藪の下ト別ト思ハ思ハ  
る。これハ猶ト忘レた。獨那君のゆえハ世ハ子宝トゆれと俺ハ黄金ハ  
優者ト。曩ハ消々地ト。那洞房の細々密言ハ又逢ハま。の紀念ハ  
五色の玉ト三箇分りテ贈マシ。今ハ猶ト護身書ハ斂めてあり。多クハ思ハ  
折々ハ合ハてみづら。慰ハこれハ野干玉の夜ト夜之餘香ハ耳ハ袂ハ  
残テ別果取ル。短宵の彼ハ夢ハ是ハ亦地方替レハ品降ル。鄙ハ去向ハ

山中草と烟の草祝逆旅の疲勞思ひも結び夢を怪しけれと獨  
 語々環小掛る護身囊の紐解緩ゆるやとら合ひも三色の玉を掌小  
 うち哉と左見右見々合ひ天て素衣の玉の五色小あて其數則五あり初福  
 富大夫次が蛇旣と撈りもる獲るといひ無類の瑞玉宮殿人物禽獸  
 花草自然と見ゆは開が中る黄と白黒る二色の玉の曩小黄金小別  
 る折掩分ち合せて小あり此は陰玉へ又青赤二色の陽玉へ留めて黄  
 金懐小在り過ふと云云と思ひ出見る玉の今も初小変られ替ふ  
 人の有為轉變俺身京師小在り時香西元盛王小仕一日も後又扇谷  
 朝與主の仕て武藏の河踰小在り一日も寵愛朋輩と傾けて出頭せざる  
 るり素小比皆禍鬼小損れては遂さうの果天和の上市る松木の  
 女塔小做降りても其里小さら猶落着て恩愛冤家と做るを斧柄の

産後小身故りら分悦まり男兒也玉五郎と飲名つけるとは落葉の嬾  
 世迷言さへは比竊聞を親甲斐小見るの克の取身の往方定難る  
 逆旅の天小物と思ひ愚癡るれと獨言々餘念るの件玉と撮合てうち  
 返見左程一右程して又見る程小松の梢小集鳥あり突然と降る  
 疾と宛投石の像く朱之が掌小載て他事る弄ぶ三彩の玉の開が中  
 黄る一玉と抓攬て虚空遙小飛去る勢禁むくもあざり朱之小  
 吐嗟とむる小驚慌して向上る鳥の形も認る身小及へも  
 あらざれば後悔臍と噬す小蹉跎多恨めとも其甲斐を思捨て歎口  
 氣を殘る玉と護身囊へ斂め項小掛て吐く俺救小過去末と思  
 ひ出さい這頭も黄金の紀の奇玉と合ひ單玩々那畜生面が卵と  
 見違へ御と去小けん亦意外の禍事る哉夫黄を中央土色なる今其

黄玉と喪ひまの俺身住り土地小離れ。流浪もつた兆る。欲或は又那玉を  
 喪ふべり。前兆少大蛇小香々。夢と見さ欲開る左まれ右もあれ黄金再  
 會を折件玉のいふ老つ。と問れば何と答ふ。死渡莫得宝屋の空る生  
 涯黄金小逢がうの舊て許マの銭小あつ。死奇化其ると畜生面小りて攫れハ  
 誰が怨を鈍きも涯りあ。めと星鼓の互ければ心も鈍くまけよ。と不問語  
 身と摘て腹より出ま思ふ。由るも想過一。卒や去向といそいで玉の恨の  
 玉柳筒二裏る。紗袂と开が儘肩小うち掛れ。中細く走首尾圓く。蟾子小  
 も似る蜘蛛の罟の編の菅笠戴れて。窘くも脚曳の山路と只管いそ死に  
 ゆく。二三里許小まで。日影傾く夏の日。昔春る小近。死久礼畑の三池。卯小池  
 来ふけり。這頭ハ大既木。孰路少。年十二。三より。比ま。遊耽り。地方るれ。今  
 福富の家と知らね。又通路人小諮。福富村の稍盡。死る。那店舗小来て

見れ。是鉄とま。小教馬。居在り。昔の梯。い。同口。僅小。二間。小過。む。洪。漆  
 の。れん。さ。る。本。す。ぎ。え。ん。と。ま。ま。う。く。と。と。暖。簾。酒。帘。杉。葉。建。る。又。六。が。門。ら。ら。ち。り。極。樂。と。人。の。い。と。も。世。渡。り。苦  
 老。死。海。と。山。里。小。真。愛。と。敏。系。死。夏。草。の。志。の。小。あ。る。甘。萱。の。擔。半。分。の。朽。板。庇  
 哀。れ。日。々。小。舛。賣。の。地。酒。と。や。齋。齋。ぐ。ら。ん。店。の。傍。小。水。埒。あり。又。半。切。の。沙。桶。あり。  
 裏。面。少。左。右。小。酒。樽。あり。皆。吸。子。と。附。れ。る。片。隅。小。燈。油。樽。あり。棚。小。大  
 小。の。紙。囊。小。稠。る。晚。茶。と。線。香。あり。中。折。の。鼻。紙。返。魂。紙。あり。草。履。草。鞋。の  
 吊。さ。れ。て。地。天。泰。の。象。あり。年。十。四。五。許。る。一。個。の。小。廝。の。酒。沽。ふ。客。を。待。托。ま。し。不  
 登。見。小。尻。を。掛。て。外。面。と。長。視。て。居。り。又。店。の。上。屋。る。錢。埒。の。頭。少。年。二。十。九  
 る。一。個。の。女。房。は。京。深。の。榜。の。單。衣。の。申。此。時。可。る。小。両。麻。の。禪。ま。て。徒。然。る。鉄  
 苧。と。績。て。在。り。當。下。朱。之。介。の。這。店。舗。の。光。景。と。孰。い。と。ち。見。入。れ。て。脱。合。る  
 菅。笠。引。提。て。找。と。入。ら。す。く。あ。ぬ。時。小。廝。の。又。蝮。く。聲。と。被。て。入。ら。せ。め。づ。好。酒。の。小





玉一口立里子川巻目下

九



のせき  
遺跡と尋て  
あひだのすけ  
朱之入福富  
村小造る

三石童子言巻四

文治六年二月





世所所用不達者とも心隈多く使れる素より願所へ這美を饒させぬか  
 言真実者小説購めつて己が悪事と塗秘を舌も輪るや熱脂刷毛の色  
 出さぬ辯毎利口小阿健は浅く説惑のされ美鉄ひつ點頭て思ふ勝  
 御身の誠心最辱く估れども見らる如く佳むかる寒店る小のふま  
 ぐゆき副管ると使ふ力にあらむか然りとも面も難く出でいねと  
 小忠二の京浪速小先代の賒身くもの非如死て債るも今人代り世も異  
 るまへ誰致よく舊兼用と果さるる思われとも然らそ那儘ふて  
 可借事之取り々涯り債りもあべく且左思へも立よりて那里の安否も訪ん  
 とそ猛可の逆旅の準備とあ身單出てもきける大昨日のるり非如其餘  
 如意らで淹留久あるととも孟蘭盆前中必還ん其折小こ御身は  
 上と告て言よく商量を成ると成らぬ他が隨意奴家が自由小做がらり

其折中の店番まで留守の帮助小做ある小忠二も天々思ひ先奥へ赴  
 る。指名中の相識小做りて休ひぬか。や、這方へと他事由る心隔ぬ長暖  
 簾抗々徐小誘へ朱之介の心とまると開が儘亟立難る計較折け  
 安からぬ肚裏小思ふら小忠二の京浪速を走り遠れる賒この首尾好もあれ  
 又くもわれ俺小干渉するらねも他果して左思小造りて船積許止宿其  
 俺と黄金が情由あるも又浪速の陣館で俺身追放せられ去るも他必  
 ぞ知りてその盆前小から来ば阿健が商量空と做て必俺と追出さる然る時  
 盤纏もる阿容々々として出で智計る者小似れども并其折小主張  
 苦小病の秋と大胆無敵の色小毫も見さま猶然氣るは面色多引  
 奥中を介小ける佳而指名も朱之介小初對面の口誼果て夕膳と薦め俗  
 させぬ。歎待殊小淺くね朱之介其甲夜間小故中さへい出て詞巧小

慰まば阿健のほらん措名も詞敵とほらんとて俱小瀟々思ひなり。介程小  
 朱之次郎店小敗る懶垂て下太郎と共侶小就て枕小就より長途の暑熱小  
 疲果々熟睡二時許小あて忽然と睡覚て心地猛可小例るらむ全身太く  
 發熱も且癢の堪がけれ姑且もなと放しぬ現心小抗く程小其曉  
 天小又睡て起出る比熱氣醒て心地生平小異なる事なり。只怪死一夜の  
 間小朱之次郎が全身小粟の如に瘡出れて毫も絶間あらざりしとみづらひいま  
 知らむ下太郎の夙見出てある什麼と訝れ阿健措名も是を見て告る  
 朱之次郎驚愕して袖を褰けて其を見ら裳と反て脚を見り鏡を借て  
 照し見る面部總身果あて瘡あり何の故るぞ知りるれば且散馬は且訝  
 りて肚裏小思ふ大蛇小吞れて死る者も蛇毒小より。突爛を毛髪  
 脱て目鼻も一緒小做る者ありと物の本小寫しもとめり。俺大蛇小吞れは是

假寐の夢へけれ蛇毒の中るべもあらむ。浪速の陣館も久しく禁微せ  
 らしむる牢瘡るべしと思ひのうらち明て人小生口をさるれば敢又真愛とせむ。  
 日と麻共自然小愈べしと思ひのあける程小是よりの後漸々小其瘡都て大く  
 るりて全身腫るるに阿健措名も是を厭ふてあらむを思ふも亦  
 らぬといひ移り山歸來忍冬を連り煎ど薦るも然るるの湯依也。  
 瘡るべもあらむ果に膿水流れ生る其臭氣堪がらける人小食鼻を掩  
 ふも今小店も在せがごと。臥草儲も回数るは奥のく敷あ人小傳傳  
 とと怕れて僅小席二枚布る空小室小在せと三度の飯と與るものも看病  
 者るるけの左右も程二十日有餘の日數麻て七月十一日の曉小小思ひ  
 もる京浪速の餘も果も左思よりかり来ければ阿健措名も阿健  
 ららむ。就て浴を飯と薦め留るの損益と告るも朱之次郎も阿健

〇難て猶黙るあり。〇小忠二のいふ是を知らざる。〇其詰朝阿健の言不  
 〇已と云ふ。〇小忠二の叫く。〇比朱之が不訪れる首より。〇他は悪瘡出来難  
 〇及び。〇尾まで事送る。〇告ぐ。〇小忠二の敬篤なる。〇果ては。〇那珠  
 〇之の朱某へ入。〇忌む。〇破落戸。〇刺罪人。〇作り。〇身と措。〇此故。〇這  
 〇頭へ流寓。〇其故。〇箇様々々。〇如此。〇情由あり。〇當春。〇朱之が  
 〇大和より左界へ来て。〇船積許止宿せし。〇物買。〇為る。〇情地。〇黄金と押親。〇  
 〇臭聲。〇又。〇其支を見。〇荷。〇天翁。〇周防より。〇還る。〇馳。〇断。〇朱  
 〇之。〇追。〇其。〇後。〇又。〇朱之。〇乳守の。〇娼妓。〇今。〇様。〇自。〇殺。〇の。〇事。〇拘。〇ら。〇ひ。〇  
 〇久。〇多。〇禁。〇獄。〇せ。〇られ。〇幸。〇ふ。〇あ。〇て。〇解。〇屍。〇人。〇の。〇罪。〇と。〇免。〇れ。〇ら。〇れ。〇他。〇大。〇和。〇不。〇在。〇り。〇時  
 〇舊。〇悪。〇も。〇亦。〇尋。〇ら。〇れ。〇三。〇好。〇職。〇善。〇主。〇の。〇制。〇度。〇と。〇あ。〇て。〇那。〇身。〇と。〇追。〇放。〇せ。〇れ。〇ら。〇れ。〇ま。〇少  
 〇は。〇隨。〇ふ。〇叫。〇び。〇告。〇ぐ。〇阿。〇健。〇の。〇し。〇措。〇名。〇と。〇呆。〇れ。〇て。〇口。〇を。〇鉗。〇て。〇居。〇り。〇當。〇下。〇小。〇忠。〇二。〇又

〇左。〇界。〇の。〇浮。〇宝。〇屋。〇の。〇脚。〇一。〇家。〇見。〇孰。〇も。〇恙。〇事。〇は。〇き。〇勿。〇論。〇大。〇爺。〇荷。〇三。〇太。〇主。〇  
 〇所以。〇あり。〇て。〇枝。〇太。〇郎。〇刀。〇称。〇と。〇黄。〇金。〇刀。〇称。〇と。〇携。〇て。〇又。〇周。〇防。〇の。〇枝。〇店。〇と。〇船。〇出。〇做。〇さ。〇  
 〇留守。〇を。〇咄。〇め。〇の。〇脚。〇目。〇懸。〇り。〇ゆ。〇朱。〇之。〇の。〇志。〇も。〇城。〇藏。〇主。〇の。〇噂。〇也。〇創。〇り。〇て。〇  
 〇知。〇り。〇ひ。〇れ。〇介。〇る。〇那。〇破。〇落。〇戸。〇を。〇這。〇頭。〇に。〇留。〇在。〇ら。〇る。〇の。〇異。〇日。〇左。〇界。〇へ。〇さ。〇え。〇る。〇脚。〇身。〇  
 〇亦。〇在。〇下。〇も。〇疼。〇ら。〇ぬ。〇腹。〇を。〇撈。〇り。〇て。〇思。〇われ。〇ん。〇の。〇る。〇を。〇第一。〇黄。〇金。〇刀。〇称。〇の。〇為。〇宜。〇  
 〇か。〇も。〇倘。〇離。〇縁。〇と。〇せ。〇られ。〇る。〇後。〇悔。〇臍。〇を。〇啜。〇ん。〇の。〇別。〇又。〇京。〇浪。〇速。〇る。〇昔。〇に。〇除。〇け。〇債  
 〇ても。〇悲。〇乞。〇ふ。〇の。〇誰。〇も。〇皆。〇沙。〇汰。〇及。〇び。〇ど。〇可。〇惜。〇盤。〇纏。〇と。〇費。〇を。〇浪。〇速。〇三。〇界。〇京。〇左  
 〇界。〇まで。〇火。〇火。〇暑。〇も。〇厭。〇む。〇西。〇東。〇と。〇走。〇達。〇り。〇徒。〇小。〇還。〇り。〇ゆ。〇け。〇無。〇要。〇の。〇家。〇あり。〇冤。〇家。〇  
 〇人。〇増。〇へ。〇水。〇増。〇と。〇さ。〇る。〇要。〇る。〇人。〇と。〇一。〇日。〇も。〇養。〇を。〇何。〇せ。〇無。〇事。〇と。〇と。〇吐。〇け。〇措。〇名  
 〇も。〇俱。〇不。〇慰。〇難。〇と。〇理。〇ふ。〇れ。〇れ。〇も。〇奶。〇々。〇と。〇故。〇と。〇豫。〇より。〇知。〇り。〇る。〇一。〇宿。〇も。〇留。〇め

むらや昔馴染とて訪れ一人を井が儘出遣人のさまが御身のかへ  
 で来候と候ゆ故ふことと久阿鏡も嗟嘆あて今千萬悔ても甲斐を  
 和殿樹よく誘へて出遣る安らるえと久小忠二沈吟て身と起り外面へ  
 遠く出て見ぬ約莫羊响許おそ那里ぞ飲買合け小忠二最故と居坐  
 行車と牽りて去り却朱之众の臥草不造り別後の口誼を述て公を。和殿舊  
 縁ある故訪と然るるが。俺左界を穿るるの井のらむとも覚あべ。知  
 ら如俺家の船積氏の親族ぞ且黄金多姍家の庇に依るるを這故の  
 他對して和殿と這里小留めが。又和殿罪あり浪速を追放せられしを  
 や且當國の京浪速不遠か。是も亦憚りあへ。裕と云恰と云身重瘡ある病  
 人を半遣の無慈悲の似れと実小己ことと速立去て他所へ歌店へ移  
 るると言苦々々。宣示せし朱之众ら。皆て豫期したるるれ。敢喉と氣色

ちく稍身と起りく答る。井のらむる。左界を俺上と云云と身くひし。
 只是人の娼嫉を。よくも查しぬ。又浪速の陣館を。俺身追放せれ
 る。素より冤屈の罪を。誰と知らぬ者。これども出ておとら。宿不樂を
 かてある。死身の野曝ふ。俺も亦男子と立去る。厭か。今俺腰の
 盤纏を。昔俺母の福富翁より受合る。算帳の残りあり。其金目今遞
 與あねか。と豪を。小忠二。何をい。昔和殿親子の別れ
 故翁とりの取せぬ。金子の則十両を。俺もよく知る所。其外算帳の
 送りある。たか。果む朱之众。呵々と冷笑ひて。小父と。思惟と俺
 母當家。在り。程四稔五稔扱使れ。給銀を。どの夢。又黄金少女。飽ませ
 る。五色の玉を。返。なれ。其報。何取せる。又黄金少女。飽ませ
 琴と教え。中免許。奥免許。謝物の定。其頭も。都て無賽。

別不臨て十兩金の銭別之恩がきく物せられ腹の立ども俺母人ちむらね何と  
 へで受りし是れは残金なりといふ今この折に其并帳と果され其神輿と居て  
 幾までも養れぬ鉢でも動く俺あはれ先其金うらまきと執分比返さる人の  
 膝うち鳴らして説誇れば小忠二も亦勃とて聲高きふ答る事開と今ゆら  
 ろの秋昔世盛なり日故翁の慈善なる和殿親子と年許留置在る  
 たは衣裳調度の費と厭ひ和殿其師と擇とて習讀書と教ゆり洪  
 恩海山而已るや然ると又別臨て十兩金と賜り過分の造化さるる  
 其折不足をいひせ當家既衰て昔の事預らざるの咱も向いて理る  
 らぬ理りと理りめりていづとも少く耳あはれ然るとも出ておかどとる是則  
 豪奪之先村長お告知ら守へ訴奉ら卒觀音寺へおどやと敦園暴く  
 曳立る其心と拂いて毫も動ぎ疾視嗜る聲高き觀音寺でも勢至院

てもこの我お就て一分二厘圍にのら俺さるる碟子お受装衣凍藻衝かき  
 ると怖る者歎と弱目と見せぬ人の負と魂火と發と争ひ果るるもと前より  
 竊聞さるる阿健の開を儘知るる朱之入ら向いて珠刀糸と人たり  
 初御身のまはせし時奴家がいと忘れ秋今有任る寒店を副管とい  
 要るけれども小忠が還るまで止宿へ然るる厭から成ると成らぬ他が隨意  
 奴家が自由お做らざるのとひ今のさるる然ると思ひがけぬ其昔のものと出  
 銭おせり欲きとも羨する事あらざる聊おはれども奴家がお同銭するて  
 路次買おきおせん觀音寺までおたぬ好藥湯もありぬ湯治るる瘡愈  
 る左も右も身單の生活種へ出来ぬ由る腹と立きとも鄙語お膝  
 とも商量人の意見お就も亦其身の為におあらざると賺勸解包金へ檢集する  
 藻塩草二分秋二分秋紅白線と拭る儘お取らまれば朱之入の黙然たる肚

裏の思ふ。小忠二言品憎ま俺も亦いれ随と角口をこれら然つと物も  
 べもあら。今阿健が和鮮と听そ二分まれ三分ま合らる俺身圓漬れ做て  
 失ふ。聊とも和鮮料あり俺言品の立ぬあらね。是と別の潮もを觀音寺  
 湯治せと尋思とま。包金を合せて押て見ら阿健向ひて答る。敷論定  
 其理あり。咱も争ひと好むあらね。忠公言品の積り身堪難て。其  
 であれ。その人情の出来。實の脚身の意見。任て觀音寺へ赴て湯治さ  
 思へ。俺腰立ぬと争何のせん。便轎と央て那里まで融通で遣りね。憑む  
 豪を。小忠二推禁め。そ又栄曜の上。装入觀音寺まで。路の程五六里餘  
 る山路。其轎錢を誰欲か。況今社客の田の券と。披最中。免備轎  
 る者。これ。准備せ。や。咱も今朝市。商賣。車一輛買合。和郎と  
 載。遣ん為。み。推て徐。路費。省く便宜あり。謝狀寫て疾。疾

と説訖。聲高。や。丁太郎措名も在ら。風。膳と拵。珠刀拵。飯  
 薦め。硯と紙と先。七。朱。と。叫ぶ。隨意。丁太郎。心。と。箱。硯。と。引。提。紙  
 さ。の。と。来。ふ。れ。小。忠。二。墨。搦。流。て。謝。書。の。文。言。と。朱。之。之。好。ま。と。既。和。睦。の  
 上。ま。れ。勢。推。辭。と。ま。朱。之。之。阿。容。々。と。書。寫。を。一。通。花。押。と。物。と。小。忠。二。渡  
 拵。折。丁。太。郎。措。名。指。揮。の。膳。拵。を。と。來。て。朱。之。之。薦。め。け。り。當。下。阿。健。の。立。ま。く  
 也。又。朱。之。之。向。ひ。て。さ。う。珠。刀。拵。今。餘。波。れ。做。り。飯。飽。ま。飯。と。喫。ぬ。ひ。御。向。も。い  
 志。の。ま。か。り。御。身。と。留。め。が。さ。ら。左。思。ふ。浮。宝。屋。と。言。え。と。憚。る。故。れ。送。り。疎。く。ら。ま。も  
 願。ふ。早。く。瘡。愈。て。孰。の。里。孰。の。浦。も。住。着。ぬ。と。祈。る。の。を。然。ら。ば。そ。と。昔。別。了。得。ぬ  
 老。波。深。切。の。言。ふ。と。剛。と。征。ま。れ。朱。之。之。唯。々。と。さ。り。飯。の。吭。を。噎。ぬ。と。各。難。て。七  
 目。送。り。け。る。悠。而。湯。淘。飯。果。も。が。小。忠。二。丁。太。郎。も。傳。せ。朱。之。之。坐。一。高。蒲  
 團。と。吊。り。て。背。戸。へ。お。て。與。て。准。備。の。車。から。載。る。其。蒲。團。を。折。累。て。敷。物。を。ま。る



是より東

福富村掃除揚

小忠二

丁七舟

六九

大英堂三徳



福富の村盡  
 知小忠二  
 朱之衆と出  
 遣る

朱之衆

三石堂三徳卷四

大英堂三徳

他の敗る衰一箇大なる竹笠一箇湯飲の碗飯箸箸の内食の握飯也。  
 又朱之介が従来の衣裏小腋挿の刃刀の杖扇子に至るまで漏まるとる車載れ措  
 名も背戸不知て告別を準備送る敷去か小忠二丁太郎朱之介の坐り車と更せ  
 村盡を送るも送り事懇切に似れども小忠が壯介を備富村の事わら猶  
 係合ふるべと思へば送る風境と云えとて小程の福富の村盡迄は他郎の  
 境小忠は時小忠二朱之介の觀音寺の城下に至る去向の路と具敷て丁太郎を  
 送る還去りける素も惜む別あわねど小忠二思ひの随小朱之介と半遣ても及て  
 快からざる所も況朱之介が殘忍なる物の哀れと知者るる今脚を解と彼  
 御小呻吟ふ憂苦艱難糊糊の枝小離れ如水虎の水と失ふ似る心細の言方  
 る小忠二王僕のかへてと幾番と見る小忠二夫妻阿健の下の下話  
 小程小朱之介は是より推木と左右合せてみらる車遣まれば素も孰れ

技ある病で腕力乏しければ一推推て息と吻は二推推て車上下俯き其苦辛  
 冬くもあらし只沸々と口と極めて阿健と小忠二罵るの候は孰の日孰の時  
 觀音寺へ造入と思へ心焦燥も筋力及べぬあらば西と這日十町過き餓  
 時一碗の飯を買て喫ふの宿を求め欲まふ人皆其毒瘡を見て怖れ  
 一宿も留る者な一夜只得稻塚の共陰或は又里の空屋の檐下へ便りて車を寄て  
 露宿するの殘暑は退きされ書路もくもあらば况雨も風の吹日路の  
 泥土車找まで破れて凌ぐ不足る衰も敗れ雨の漏るると身濡  
 瘡も亦痛く心地死ぬ覚る其折々これあれども命數は盡されお徳  
 ても猶死るさけの抑這朱之介晴賢の始母親阿夏と俱小近江の賊寨在  
 時強人の所作と見て長と成る者れば心残力乏るのみ其後福富大  
 史次の家小寓居ある時其氣質見れば甚る甚る至らざれば徳而香



西元盛平仕一日も又扇谷朝興仕し時も軍龍陽の籠と負きて竟不敗と取  
 ることなり。矧又大和老女姑賢妻の帮助と云ふ恩不報ふ仇をりくせ。其悪  
 既極りて冥罰の致所おの悪病と稟するべし。余れども人の果報の善悪俱お  
 過世あり報ふこの速るると遅るると同し。余れども人其遅れを見て天と怨る入其時あると  
 知らざるん朱之众が一浮一沈前身靈蛇の怨お由其終と見て知るべし。此の問話題  
 体是時未朱之众へ約莫五六里路と云ふ四五百歩をて。枸杞村と喚做し。片山  
 里まで辿り来りけり。這里よりて觀音寺の城下へ二十町あまるといへとも去る。都て  
 山路をて車の找むるものら權且這里を車と駐めくお息をも克むる人英之  
 牽せむと尋思と云ふ其曠昏小孤屋ありける。壯文の門を車と遣駐めて呼んで  
 請ふあり。何ものを云や久開ら下の回解分ると聽録か。

新局玉石童子訓卷之四下冊終 和田

曲亭翁口授編 一陽齋後豊國画

新局玉石童子訓

上帙五卷 既發市  
下帙五卷

此書は曩小曲亭翁著編近世説美少年録と標題し初編  
 上二編不至るとは發販し普世評高し今昔無比の珍書因て雲觀  
 看官後輯の發市と俟るも故有て翁稿と脱賜らば爰おて第三  
 輯より下四輯と嗣支のるる漸く刊行の時と得て今年稿本成り及  
 中絶既小年と經て最大う後れりて書名と玉石童子訓と換らるる  
 然れば本傳の美少年録の第四輯あり是より不怠編と嗣全部の  
 結局に至る支近に在り巻と緋を添へて題名のと見聞し事の  
 譯と識あるる主顧君子お止口なる前編と印し高評を賜らる  
 本房の幸甚しからんと

江戸大傳馬町三丁目 文溪堂丁子屋平兵衛謹白

